



キャッシュレス化が進む中国

世界に目を向けると、実は、フィンテックを活かしたイノベーションは、私たち一般生活者の日々の支払いにおけるキャッシュレス化に顕著に表れています。例えば、中国では、QRコード（二次元コード）を使った非接触型決済サービスであるアリペイ（Alipay）とか、メッセンジャーのモバイルアプリであるウィーチャットペイ（WeChatPay）と呼ばれる支払手段が社会に浸透し、キャッシュレス化が驚異的なスピードで進行しています。街角の市場で買物をする時でも、博物館に入館する時でも、店や施設のQRコードを自分のスマホで読み取れば、決済が完了します。また、こうしたアプリを使えば、友人への送金ができるほか、タクシーの配車や映画チケットの手配から決済までを途切れなくシームレスに行うことができます。つまり、中国の人たちは、日々の買物などの支払いの際に、財布を取り出し紙幣を数えて渡し、おつりをもらう、というよ

うな手間がかからない、非常に利便性の高い決済サービスを利用しているということです。

このようなキャッシュレス化の動きは中国だけでなく、韓国や東南アジア諸国でも起きています。その大きな理由としては、スマホやインターネット

News & Opinion

紙幣を持ち歩くのは時代遅れ!?

近年、新しい技術を活かした金融サービスの創出を指すフィンテック (FinTech) が、大きな注目を集めています。仮想通貨もそのひとつですが、私たちの生活のキャッシュレス化を進める技術もそのひとつです。

世界を見ると、キャッシュレス化が相当進んでいる国もあり、日本はむしろ遅れています。これからは、身近なキャッシュレス手段を使いながら、フィンテックへの関心を高め、金融リテラシーの向上につなげていくことが大切です。



小早川 周司 Shuji Kobayakawa

明治大学 政治経済学部 准教授

【研究分野】貨幣論、金融のミクロ経済分析

【研究テーマ】フィンテックと貨幣の将来像

【主な著書・論文】

「Project Stella: 日本銀行・欧州中央銀行による分散型台帳技術に関する共同調査報告書」(共著・2018年)

「Central Bank Digital Currencies」(共著・2018年)

「Distributed ledger in payments, clearing and settlement - an analytical framework」(共著・2017年)

「Monetary Policy after the Great Recession」(共著・2014年)

日本のキャッシュレスに向けた取り組み…ユーザーに「ウォー！」を

を活用することによって、金融サービスが提供できるようになったことが挙げられます。例えば、中国の奥地に暮らす人たちは、いままでも金融サービスにアクセスしづらく、不便な生活を強いられていました。その対策として従来考えられていたのが、銀行の支店やATMネットワークを全国津々浦々に展開することです。しかし、そのためには膨大な資金や労力が必要になりますし、それに見合う収益が上げられるのかも疑問です。ところが、そうした地域でもスマホが普及しました。インターネットにもアクセスできるようになりました。そこで、スマホを使った技術により、決済サービスを提供するという発想が生まれたのです。あらゆる人々に安定的な金融サービスを提供することを金融包摂、ファイナンシャル・インクルージョンといいます。これは中国政府にとっても重要な政策課題です。それが、フィンテックと民間IT企業の活力によって打開策が見えたことで、一気に進展させることができたのだと思います。

それに比べて日本では、銀行や郵貯のネットワークが全国に行き渡り、ATMがどこにもあります。国民の9割以上が預貯金の口座を持っていて、ある意味、こうした現状に満足しています、このシステムをより新しいものに変えていこうという思いが生まれにくくなっています。その一方で、キャッシュレス化は、銀行などが提供する従来のサービスでは応えられないユーザーの利便性向上につながる、という側面もあるのです。実際、中国のアリペイもウィーチャットペイも運営会社はIT関連企業です。スマホで決済するという発想はIT関連企業ならではの取り組みであり、ノンバンクだからこそ、ユーザーの利便性を追求したサービスを提供できたとも言えます。日本でも、バスやスイカなどの電子マネーが駅の改札だけでなく、駅構内の売店やコンビニでも使えるように

なっていますが、スマホをさらに活用して、私たちの日常生活により密接かつシームレスなサービスを提供するようになると、キャッシュレス化が一気に広がるかもしれません。その意味では、QRコード規格の統一に向けた動きは注目すべきでしょう。現在は、コンビニのカウンターに決済手段毎の専用の端末が並んでいるような状況ですが、QRコードを利用すれば、店舗側は専用の端末を設置する必要がないため、手数料負担を軽減できるほか、ユーザーもスマホでQRコードを読み取れば決済が完了するため、財布から紙幣やクレジットカードを取り出す必要がなく、お互いにメリットがあると言えます。さらに、こうした決済手段が私たちの生活によりシームレスなサービスを提供できるようになれば、利便性の向上を実感できるようになるでしょう。ユーザーに「ウォー！」という感動をもたらす——フィンテックを使ったキャッシュレス化にはそうした潜在力があります。

そうした側面ばかりに目を奪われるのではなく、既存の技術も使いながら、身近なところできざまなイノベーションが起きようとしていることに目を向けてほしいと思います。例えば、仮想通貨を支える技術として注目されるブロックチェーンは、分散型台帳技術という新しい技術です。これをさまざまな金融インフラに活用させていくことができれば、現在、各種の金融サービスにかかる手数料やシステムの運用コストを画期的に下げることができるといわれています。しかし、高度に発達した現在の金融インフラに分散型台帳技術をすぐに取り入れることは、相当にハードルが高いと言えます。サイバー攻撃に対して十分な備えを講じる必要もあります。このため、多くの国の中央銀行や金融機関が調査や研究を行い、潜在力のある技術だと認めています。この技術の全面的な実用化に向けては、もう少し時間がかかりそうです。むしろ、ユーザーの利便性を高めるという、ユーザーのニーズを踏まえたキャッシュレス化は、すでに確

く、ヨーロッパでも広がっています。スウェーデンでは、モバイルペイメント（スマホなどのモバイル端末による電子決済サービス）が定着し、市民は日々の生活で紙幣を持ち歩くということがほとんどないようです。国立銀行のリンクスバンクでは、紙幣を補充するためeクローナという、中央銀行が発行するデジタル通貨を検討しています。キャッシュレス社会は世界の潮流と言えるでしょう。日本でもさまざまな検討や取り組みが始まっていることに、私たち生活者も関心を持つことが欠かせないと思います。



まず、身近なフィンテックの知識を身につけよう

フィンテックは、最新のテクノロジーによる大規模な金融改革であるかのようなイメージを持ちがちですが、

立されている既存の技術も使いながら着実に進んでいるのです。

このユーザーのニーズを掘り起こすという発想が重要です。例えば、日本は自然災害の多い国です。スウェーデンのように紙幣を持ち歩かない環境になってしまつと、電気や通信網が止まる、システムがダウンするという災害が起きた時、被災者は生活を支えることができなくなってしまう。日本では、紙幣と電子マネーやデジタル通貨が共存するような環境を設計するこ



とが重要です。すると、ユーザーはキャッシュレス化が進むもともども、多様な支払手段の選択肢を持つことができ、自分のライフスタイルに合った支払方法を選ぶことができます。それが、日本人にとっては安心をもたらし、利便性の高い環境と言えるのかもしれない。また、フィンテックを使って、学生のキャンパスライフのデジタル化をどのように進めていくかという論点もあります。例えば、デジタル化された学生証に電子マネー機能を付加し、キャンパス内外で『めいじろうコイン』を使えるようにすれば、これを使って新たなサービスを展開するとか、ユーザーニーズを掘り起こしていかつというきっかけになるかもしれません。フィンテックがやってくるのを待つのではなく、フィンテックを使おうという気になれば、キャッシュレス化への関心も高まり、それが私たち自身の利便性の向上や長い目で見た資産形成にもつながります。そのための知識を身につけていくことが、金融リテラシーなのです。